



グローバル・フォーラム会報

THE GLOBAL FORUM OF JAPAN BULLETIN, Summer 2001 (Vol.2, No.3)

第3回日米対話開催さる 「米国新政権下における日米安保」

当フォーラム (GF) は、国際交流基金日米センターの助成を得て、5月27-28日東京において、マンスフィールド太平洋問題研究所 (MCPA) との共催により日米対話「米国新政権下における日米安全保障関係」を開催した。

前夜の大河原良雄 GF 代表世話人主催夕食会につづき、28日は丸一日にわたって、GF メンバーを中心に、日米計105名の出席者が活発な議論を行った。



開幕夕食会で挨拶する伊藤事務局長

沖縄問題と日米同盟

本会議 I では、伊藤憲一 GF 世話人事務局長が議長となって、「ブッシュ政権下における沖縄問題と日米同盟の維持」が議論された。まず、ジェームス・アワー・ヴァンダービルト大学教授から「日米関係を米英関係のレベルにまで高めることができれば、米国は嘉手納・横須賀以外の在日、在沖縄米軍の兵力構成を柔軟に考え直すだろう。また、メガフロート構想によって、普天間だけでなくその他の施設もそこに移転することが可能となり、必要な抑止力を維持しつつ、米国のプレゼンスを下げる事が可能だ」との基調報告がなされた。

これに対して、田久保忠衛杏林大学

社会科学部長、ファリエル・サイド国務省日本部担当官の2人のコメンテーターおよび会場の参加者から、「日本が集団的自衛権の行使を可能とする憲法解釈に踏み切ることが、沖縄問題の解決につづる新しい日米同盟のあり方を可能にする」等の活発な意見が出された。

アジア・太平洋地域問題

本会議 II では、ゴードン・フレイク MCPA 所長が議長となり、「地域問題に対するブッシュ政権の新たなアプローチ：中国と朝鮮半島」をテーマに議論が行われた。まず H・C・スタックポール・アジア太平洋安全保障研究センター理事長より「アジア・太平洋地域の安全保障モデルとしては、多国間アプローチが必要だが、それは NATO のような機構ではなく、むしろ二国間関係を強化し、紛争防止を含む総合安全保障アプローチを強化することである」との基調報告がなされた。

つづいて、秋山昌廣元防衛事務次官、デビッド・ステインバーグ・ジョージタウン大学アジア研究学科長の2人のコメンテーターおよび会場の参加者から「統一朝鮮は中国との関係を重視する可能性があり、それを前提として地域の安全保障体制を考えるべきだ」等の意見が出された。

新ミサイル防衛構想

つづく本会議 III では、大河原良雄 GF 代表世話人が議長となって、「新ミサイル防衛の意味合い」をテーマに議



活発な議論を交わす出席者たち

論が行われた。まずジェームズ・ブリットアップ国防大学国家戦略研究所主任研究員より、「日本は北朝鮮のノドン、テポドンや中国の IRBM の射程距離内にあり、朝鮮半島や台湾海峡の有事には、在日米軍基地や日本が攻撃目標になる可能性がある。こうした脅威に対処するには抑止だけでなく、防衛を考えなければならない」との基調報告が行われた。

これに対し、渡邊昭夫平和安全保障研究所理事長、ダン・ボブ元ロス上院議員顧問の2人のコメンテーターおよび会場の参加者から「中国はロシアと同じに抑止が有効なのか、それともならず者国家と同じで抑止は無効なのか、それが問題だ」等の意見が出された。

同日夜には、ゴードン・フレイク MCPA 所長主催の閉幕夕食会が行われ、会議は成功裏に幕を閉じた。今回の対話内容は、翌29日、30日付の『朝日新聞』、29日付の『日本経済新聞』、31日付の『Japan Times』に記事として掲載されるなど、各方面で反響を呼んだ。



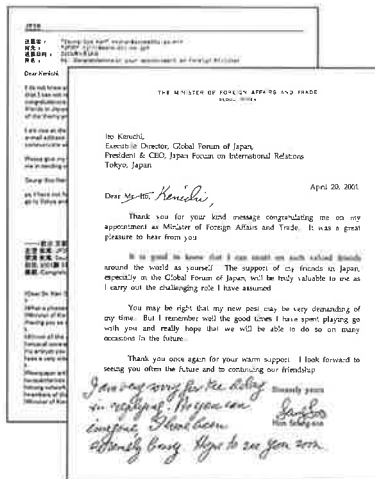
本会議 III で司会する大河原代表世話人 (右から4人目)

韓昇洙韓国新外相は当フォーラムの仲間

当フォーラムの「対話」仲間からぞくぞくと世界をリードする人材が輩出している。昨年は台湾で田弘茂外交部長(本『会報』2000年7月1日号既報)が、ルーマニアでイオン・イリエスク大統領、ユアン・パシク国防相(『日本国際フォーラム会報』2001年1月1日号既報)が誕生したが、今年に入ってからはお隣の韓国で韓昇洙外交通商相が誕生した。

韓昇洙国会議員(当時)は、昨年12月10-11日に東京で開催された当フォーラムとソウル国際問題フォーラム共催の日韓対話「日本と韓国：新たなパートナーシップのための基盤の構築」の韓国側責任者として、企画、準備段階から来日しての実施段階まで伊藤当フォーラム世話人事務局長と共に強力な推進力になった。

韓外相と伊藤の友情は、韓外相がソ



韓外相から伊藤事務局長への手紙

事務局便り

今年の「日米対話」(1頁)の参加者は、通常の「対話」の倍にあたる105名でした。予定会場の収容能力を超えて連日届く出席回答用紙の山を前にして、事務局員はどうしてお断りの返事をしたものかと、初めて経験するトラブル(?)の収拾に、四苦八苦。



2000年「日韓対話」で演説する韓氏

ソウル大学教授であった20年前に遡る。1993年12月に当フォーラムがワシントンで「グローバル・フォーラム世界大会」を開催したときは、伊藤の要請を受けて当時在米韓国大使だった韓外相が、大使公邸で歓迎夕食会を開催してくれたこともある。

外相就任に対する伊藤からの祝電に対して、韓外相からは「日本の友人たち、とくにグローバル・フォーラムの友人たちから私に寄せられた支持は、私が引き受けたやりがいのある仕事を遂行してゆくうえで、真に貴重なものです」との当フォーラム・メンバーに対する直筆の手紙や「大臣室の私個人のメール・アドレスにいつでも連絡をしてください」との伊藤あてメールが早速届いており、二人は近く再会しての囲碁のリターン・マッチも約束しあったという。

韓外相の活躍により、日韓両国の友好関係がいっそう強化されることを祈るとともに、グローバル・フォーラムのメンバーとしては、韓外相を古い仲間として支援してゆきたい。

伊藤からは「日本の歴史教科書に対する韓国民の懸念は十分に理解するが、誤解による部分もあり、一層の相互理解の増進を希望している」とのメッセージも送ってある。

■有識者メンバー新規就任

(3-5月分)

富山 泰 時事通信社外報部長
春名幹男 共同通信社論説副委員長

谷野作太郎前中国大使を招き 国際政経懇話会開催

当フォーラム、日本国際フォーラム、日本予防外交センターの三者共催による第133回国際政経懇話会は、4月20日、谷野作太郎前中国大使(写真)を講師に招き、「最近の中国情勢と日中関係」と題する講話を聞いた。

ほぼ3年にわたる中国在勤を終えて帰国したばかりの谷野大使は「改革・開放」の成果とともに環境破壊や貧富差拡大等の弊害も見え始めた中国の問題点、さらには歴史教科書問題や李登輝氏訪日問題等の日中関係のホットイシューについて、率直な見解を表明し、その後出席者との間で活発な質疑応答を行った。



フォーラム活動日誌 (3-5月)

- 3月2日伊藤世話人事務局長他、G. Flake 米マンスフィールド太平洋問題研究所(MCPA)所長他と懇談(当フォーラム会議室にて)
- 3月15日第132回国際政経懇話会(近藤剛政治経済研究所21代表他22名)
- 3月26日伊藤世話人事務局長他、陳燕南台北駐日経済文化代表処文化組長他と会食、懇談
- 4月20日第133回国際政経懇話会(谷野作太郎前中国大使他21名)
- 5月15日第134回国際政経懇話会(川上隆朗前インドネシア大使他18名)
- 5月27日「日米対話/米国新政権下における日米安全保障関係」開幕夕食会(大河原良雄代表世話人主催)
- 5月28日同上「日米対話」本会議I・II・III(G. Flake 米MCPA所長、伊藤GF事務局長他103名)
- 5月28日同上「日米対話」閉幕夕食会(G. Flake 米MCPA所長主催)